

音楽科の主張

1 教科で育みたい人間像

音や音楽には、人々の心を動かし、豊かにしていく力がある。音楽は古くから儀式や祭りなど、歴史や人々の生活とともに存在しており、様々な音楽のジャンルが互いに影響しあい発展してきた。歴史や文化的背景をもつクラシック音楽や、世界各地の伝統的な音楽、新しく生み出されるポピュラー音楽など様々なものがありそのどれもが固有の価値をもって存在している。そのような音楽の価値を感じ、受け止めようとすることで感性がより磨かれ、音楽そのものの価値を尊重することにつながっていく。このように多様な音楽の価値を尊重する姿勢は、時代や思想を越えて人々の思いに寄り添い共感するということであり、音楽を通して自他を尊重する心豊かな人を育むことができるだろう。

さらに、現代においても音楽の発展や広がりには限りがなく、好きな歌手や自分が気に入った音楽をオンライン配信等で気軽に選び、楽しむことのできる時代となった。自らの生活に音楽を取り入れ、音楽を聴いたり演奏したりする人は、多くの人と同じ時を共有し、その時々感情を共有することで時として言葉で表現できないほどの感動的な体験をすることができる。自ら音楽とかかわろうとすることで音楽による感動を味わい、音や音楽を自分にとってかけがえのないものだと感じるようになるだろう。このような人は音楽を愉しんでいる人といえるのではないか。

私たちは音楽科を通して、「自ら音楽を愉しむ、心豊かな人」を育みたいと考えている。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」である。子どもたちは様々な文化的・歴史的背景の中で醸成された音楽にふれたり、自分がつくった音楽を仲間と聴き合ったりする体験を通して、音楽の価値や美しさを感じ、音楽には多様な受け止め方や良さがあることに気づいていく。音や音楽は目に見えず、時間とともに消えてしまう瞬間の芸術であるからこそ子どもたちは、感性を豊かに働かせながら音や音楽と向き合っていくのである。このような過程を通して、子どもたちは音楽に対する考え方を広げたり、深めたりしていただくだろう。

音や音楽は、「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化など」との関わりの中で、人間にとって意味あるものとして存在している。授業を通して、世の中にある音や音楽と出会い、様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解できるように学びを展開していきたい。そのためには、音楽を「つくる人」「演奏する人」「聴く人」といった立場を体験することが、音楽との理想的なかかわり方であると考える。子どもたちの「自分も取り組んでみようかな」「頑張ればできそう」という思いを大切に、音楽経験の異なる子どもたち全員が、ためらうことなく心を解放して積極的に音楽活動に取り組むことのできる雰囲気をつくっていきたい。願う子どもの学びを実現していくために、音楽科では、題材のもつ価値を吟味し、子どもが「何でこうなるのだろう」「以前学習した曲と似ている部分がある」「この曲は今までと違う雰囲気があるぞ」などの、音楽への思いが生まれるような題材選定を行いたい。

題材との出会いを通して、中学生の今しか感じることでないみずみずしい感覚で音楽を経験することができるはずである。仲間との様々な音楽の経験を通して音楽文化に幅広く親しみ、人生を豊かに歩むことができる子どもを育みたいと考えている。「音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと」を通して、中学校の音楽の授業だからこそ育むことのできる、子どもの学びを実現させていきたい。